



ペパーミント・マスカレード

前橋梨乃

公開版

for Smart Phone

Contents

1

2

3

★タップすれば各章へジャンプします

1

少女は、

ずっと待ち続けた。

置き去りにされてしまった自分を、

誰かが迎えに来てくれるのを。

ずっと……。

夢から醒めると、そこは床の上だった。酒臭いよだれが、頬の下のじゅうたんをべっとりと濡らしていた。白い天井に、レースのカーテンを通した光が、アラベスク模様を描いている。

マンションの二階のこの部屋で、下方向から光が射し込んでくるといふことは、昨夜半から降り始めた雪がベランダに積もった、その反射光にちがいない。

外は二月。どうやら、昨日とはうって変わった快晴らしい。

見^{みた}田^た園^{ぞの}直樹は、もう三日、外に出ていない。

五日前のあの晩、妻の恵子が出て行った時、翌日は戻ってくるだろうとたかをくくっていた。似たようなことは前にも一度あった。

だからその翌朝も、何事もなかったかのような顔を

して出社した。

ところが、その日、恵子は帰ってこなかった。それどころか、郵便受けに、一通の速達が届いていたのだ。

中には、恵子の署名捺印済みの離婚届と、筆勢の荒い手紙が入っていた。

「もともと離婚の原因をつくった私がこんなことを言うのは筋違いかも知れません。でも、あなたがそこまです陰険な人だとは思ってもみませんでした。

私の不倫を疑っていたのなら、なぜもつと早くにあなたの口から問い正そうとしなかったのですか。もつと前に、やめろと言わなかったのですか。

表面上は何食わぬ顔をして、結局あなたは、私を疑惑の目で見ていたんですね。もちろん、先に裏切った私に、それを責める資格はないでしょう。

でも、私には、あなたのやったことが許せません。

政行さんの人格を傷つけることで、私の気持ちが変わ

一度あなたに向かうとでも思ったのですか。もしそうだとしたら、あなたは私のことを何もわかっていないのです。

私がとやかく言われるのはしかたのないこと。でも、政行さんの過去まであれこれ探って、そのあげく、あんなでっち上げをするなんて……。

彼はそんな事実はないと、きっぱりと言ってくれました。

私は、今、まちがいなく、あなたではなく彼を愛しています。そして、そう気づかせてくれたのは、じつは、あなた自身なのです。

あなたが彼を中傷したとき、私はあなたを殺してやりたいとすら思ったのです。それほど彼は、私にとって大切な人になっていたのです。

私は彼と暮らします。もうあなたと一緒にいることはできません。

もちろん、倫理的にも法的にも、私が不利なのはわかっています。でも、自分の気持ちにはつきりと気づいた今、私にはこうすることしかできないのです。

お幸せにお暮らしく下さい。さようなら」

勝手な言いぐさだと思った。

悪いのは恵子の方で、自分ではない。恵子は最後まで、わがままで気の強い女だった。

しかし、まるで少女のように嘘のないその性格を、

直樹は愛していたのだ。

「愛してたからこそしたことじゃないか」

数本のウイスキー瓶の転がった床の上、クローゼットタイプのチェストにもたれて、直樹はまた独り言の愚痴をつぶやいた。

ナイトガウンをだらしなく着た、痩せて小柄で色白の彼が、濃くはない不精髭をちよろちよると生やし、二日酔いで潰れている様は、どう見ても、妻を寝とら

れた気弱な夫という以外の何者でもなかった。

直樹と恵子が結婚したのは、今から三年前、恵子が短大を卒業した年だ。直樹が二十三、恵子が二十歳の年若い夫婦だった。

大学時代の合同コンパで知り合い、一年半の恋愛期間の後ゴールインしたという、いわば典型的な友達夫婦だ。

気の強い恵子と、神経質な感じの直樹。夫と妻という役割分担から言えば、いまひとつ座りが悪かったが、はた目にも、そして本人たちも、幸せな夫婦だと思っていた。

直樹は、業界でもけっこう名の通ったコンピュータソフト会社のシステムエンジニア。

緻密さと、執念深いと言ってもいいほどの粘り強さで仕事をこなし、若いながら、次代のホープと見なさ

れている。

二人なら、充分に暮らしてゆけるだけの収入があった。だから卒業後すぐ結婚し、家へ入った恵子は、社会というものをまるで知らない。ずっと専業主婦としての生活をつづけていた。

新婚生活が物珍しいうちは、まだそれでもよかったが、もともと積極的な性格の恵子は、だんだんと欲求不満を感じるようになった。

「私も一度世の中に出てみたい」などと言い出し、「とらばーゆ」を買ってきては、熱心にページを繰ったりしだした。

直樹は恵子が働きに出ることには、気が進まなかった。夫としてのこけんなどというものにこだわったわけではないが、恵子が職場で自分以外の男と口をきいている図を想像するだけで、どうにも我慢ならない気がした。

要するにやきもちなのだが。

そこで彼は「カルチャーセンターにでも通ったら」と勧めてみた。

恵子の方がどこかおかしいと気づいたのは、彼女が英会話教室に通いはじめて三ヶ月後くらいだった。

以前は食事中なども、大きな瞳で見つめて話していた恵子が、なぜか直樹から目をそらすことが多くなっていた。前はわがままを言っては困らせたのに、妙に殊勝

な態度を見せるようになった。英会話の教室へ行く日は、やけにそわそわしていた。そのくせ、話しを向けても、英会話教室のことは、あまり話そうとしなかった。

そして、何より、夜の交わりの回数が減った。セックスの最中も、以前のように熱中することがなくなっていた。

直樹は、そんな恵子にしだいに不信をつのらせてい

った。

直樹はその頃、企業の信用調査を主業としている会社からの発注で、企業リストのデータ別検索システムを設計していた。

ある日、その会社の担当者との打ち合わせの後、いっしょに酒を飲んだ。酔ったはずみで彼は、妻に対してもっている不信を口にしていた。

するとその男は、調べてみる方がいいと言った。そ

の会社の系列で、個人調査専門の会社があり、そこを紹介してくれるというのだ。

「なに、何事もなかったのなら、それに越したことはないじゃないですか」

そしてちょうど五日前、その男から紹介された興信所に呼び出された直樹は、一通の報告書を受け取った。

それは恵子への不信で疲れきっていた直樹を、さらに強く打ちのめすのにじゅうぶんな内容だった。

恵子が通っていたのは、時間を持て余している奥さん連中相手のカルチャーセンターではなく、かなり本格的なビジネス英語を教えている所だった。

どうせやるなら遊び半分ではない方がいいとも思ってたので、直樹もそれに反対はしなかった。まさか昼の教室に、そんなに男がいるとも思えなかったからだ。ところがそれが間違いだったようだ。

佐江木政行。

それが恵子の相手だった。ある大手自動車メーカーの生産技術部員。その会社が来年からスタートさせるアメリカでの合併事業のため、現地従業員の教育係として渡米が決まっている。社命で、仕事の一部として、その教室に通っているらしい。

報告書は恵子とその男の行状を事細かに記していた。

教室が終わると、そそくさと男の車で近くのラブホ

テルへ乗りつける。そして、一時間ばかりの短い逢瀬を楽しんでいると。

報告書には一枚の写真が添えられていた。佐江木の車に同乗してホテルから出る、恵子の上気した顔がはつきりとわかった。

許せない。こんなこと許されていいはずがない。

その写真を持つ手が激しく震えた。

直樹の心の中を嫉妬の嵐が吹き荒れた。それはもは

や殺意と呼んでもいいような感情だった。

ふと気がつくと居間で電話が鳴っている。

きつと会社からだ。

けっこう重要な仕事をしてきた直樹が、三日も無断で休んでいるのだ。会社でも困っているだろう。

直樹は入社以来四年間、きわめて真面目に勤めあげてきた。三日ばかりの無断欠勤、今ならまだ許される

にちがいない。

電話が鳴っている。どうすればいいんだろう……。

しかし今の直樹には、自分が何をやったらいいのか
さえわからなかった。

興信所から渡された報告は、佐江木という男のこれ
までの経歴にも簡単に触れていた。

それを読むうち、直樹は、もしかしたら二人を別れ

させることができるかも知れないという希望を持た。

佐江木には、結婚歴はない。三十二歳でいまだ独身だ。

勤めている自動車会社では、前途を嘱望されているエリートだが、その私生活はめっちゃくちゃである。

ほぼ半年単位で、女と同棲生活をしては捨てていく。次から次へと女をのりかえてゆくドンファンの典型の

ような男だ。

やはり恵子はだまされているにちがいない。

直樹はそう思った。

しかし、単なるプレイボーイというだけなら、そのへんにいくらでもいる。そして、セックスに寛容な今の時代、そんなことでは、さしたる社会的な非難も浴びせられないだろう。

直樹の目を引きつけたのは、特にその中であつた五

行ばかりの記述だった。

大学時代、佐江木はある“おんな”のヒモとして暮らしている。

その女というのが、女でないおんな、ゲイボーイだったのだ。

どうやら大学の学費なども、そのゲイボーイから貢がせていたらしい。

そして、佐江木の恋愛遍歴を見ると、じつはそのゲ

イボーイとの同棲が一番長い。他の、正真正銘の女たちとは、半年もてばいい方なのに、学生時代の同棲は十八歳から二十二歳まで、ほぼ三年半続いている。

佐江木はホモだ。両刀使いではあるにせよ、ホモとしてそのドンファンの人生をスタートしたことだけは確かだ。

直樹は狂喜した。

これで恵子と佐江木の仲を引き裂くことができる。

直樹はその夜、さっそく恵子にその報告書突きつけ、問いつめた。

最初は萎れたようにして聞いていた恵子が、佐江木の恋愛遍歴に話しが及んでからは、きつと目をあげてにらみつけるようになっていった。

そして、直樹が「あいつはホモだ」と断言したときには、恵子は逆に食ってかかってきた。

「聞きたくないわ、そんなこと。あの人に限ってそん

なこと、ありえないもの。たともしあつたとしても、過去のことだわ。どうしてあなたに彼の過去をとやかく言われなきやならないの。それも興信所まで使つて。私、悪いことをしたと思つてゐるわ。でも、あなた、私以上に卑劣で、陰険だわ。あなたって、なんて男らしくない人なの」

恵子は、汚いものでも見るような目で直樹を見た。そして、出て行つてしまつたのだ。

電話のベルは、まだ鳴りつづけていた。

どうしたら……いいんだろう？　僕は、これから、

どうしたら……。

恵子は僕ではなく、あの男を愛している。要するに僕は男としてあいつに負けたんだ。それは、もはや動かしがたい事実だ。

弁護士を立てた上で、恵子の送ってきた離婚届にサ

インをしようか。

しかし、たとえ、恵子と佐江木の双方からなにがしかの慰謝料をとったところで、そんなことがなんになるんだろう。そんなことで、僕のこの気持ち満たされるわけではない。

あの二人ばかりがよい思いをして、僕だけが取り残されるのだ。それではあまりにもこの僕がかわいそうだ。

あの二人に、今僕が味わっているのと同じ気持ちを味わわせてやりたい。

いったい、どうしたら……。

十分ばかり続いたあと、やっと電話は鳴りやんだ。

どうしたらいいんだろう……どうしたら……。

二日半の酒漬けの生活ですっかりもやのかかった頭をなんとかしようと、直樹は首を振った。

と、そのはずみで、もたれていたチェストの引き出

しの取っ手に、後頭部をしたたか打った。

ちきしょう！

突然、無性に腹が立った。

その取っ手をつかみ、思いきり引つ張る。

飛び出した引き出しが、空を飛んでベッドの脚に当たった。

ごとんと鈍い音。

中に入っていたものがあとからふわりと落ちて、直

樹のまわりに散らばった。

とたん、部屋中に、甘酸っぱい恵子の匂いがひろがった。

それは、恵子の下着の入った引き出しだった。

恵子は、自分の持ち物をすべて残して飛び出して行った。そして、それを取りに戻っても来ない。

それほど僕を……僕との三年間の生活を憎んでいるんだ。

そう思うと、今度は無性に悲しくなった。

とめどなく涙が流れ出した。声をあげて泣いた。

泣きながら、直樹は恵子の下着に頬ずりした。白いシルクのスリップ、細かいレースの入ったブラジャー、薄いピンクのパンティ……。薄

もう僕に抱かれることのなくなった下着たち……。

立ちこめる恵子の体臭が、ただでさえ二日酔いでもののわからなくなっている直樹の意識を狂わせた。

突然立ち上がった直樹は、着ていたナイトガウンやパジャマ、そして下着までも全部脱ぎ捨てた。

それは対象のなくなった愛欲の、ねじ曲がった現れだったのかも知れない。

裸になった直樹は、床に散らばった恵子の下着をひとつずつ取っては身に着けていった。パンティもブラジャーもスリッパも、恵子のお気に入りだったものを選んだ。

その下着たちの肌触りは、結婚前から慣れ親しんだ
恵子の肌そのものだった。

恵子はまだここにいるんだ。

判断のつかなくなっている頭で、直樹はそう思った。

そして、クローゼットの扉を開けて、鏡を見た。

恵子じゃない。

どこが？

酒のせいで張りのない肌。不精髭、そしてすね毛。

これではいけない。こんなふうではない。

完全な恵子を取り戻すんだ。

直樹は、何日ぶりかで風呂に入ろうと思った。

下校時間を知らせるチャイムが鳴っている。

蝶結びされた靴紐だけがピンク色の、

白いズック靴が、

コンクリートの上の小石を蹴飛ばした。

紺のプリーツスカートがふわりと広がって、
またすぼまる。

その布地が、

ストッキングも穿いていない素肌に優しく触れる
蹴飛ばした小石はころころと転がって、

校門の門柱にこつんと当たった。

あの人は、まだ来ない。

でも、かならずあたしを迎えにきてくれるはず。

セーラー服の少女はそう信じて、
じっと耐えるように待っている。

湯船の中でちよつと眠ってしまったようだ。

しかし、熱いお湯のおかげで、意識はだいぶ正常に戻った。

それにもかかわらず、直樹は風呂場で、髭ばかりでなく、すね毛も脇毛も剃ってしまった。

馬鹿げたことをしているとは思ったが、とりあえず、なにかひとつ決めたことをやっていたなければ、自分は生きていけないような気がした。

それに、異常な状態で自分が発想したことに対し、なにかわくわくするような興奮を覚えていたことも事実である。

寝室に戻ると、直樹はさっそく恵子の下着を着けた。直樹は小柄だった。恵子がハイヒールを履くと、直

樹より高くなるくらいだったから、サイズはぴったり合った。

ブラジャーのふくらみの中には、パンティストッキングをふたつずつ丸めて入れ、かたちを整えた。

白のスリッパを着けると、風呂上がりの色白の肌が、ピンクに上気して、なまめかしい気がした。

でき上がりにそれなりに満足した直樹は、鏡台に向かい、今度は化粧にかかった。

日曜日、二人で出かけたりする時、直樹は恵子の化粧する姿を見ているのが好きだった。時には、その日のリップやマニキュアの色を選んでやることすらあった。

だから、だいたいの手順は心得ているつもりだった。だがそれは、思ったほど簡単な作業ではなかった。シャドーは、濃くはならず、しかし、目や鼻をしっかりと引き立たせるように入れる。チークはできるだ

け自然な感じにさす。ルージュは、上品な色気をもつて……。

一時間あまり、失敗してはやり直し、直樹は化粧に熱中した。

その甲斐あって、出来映えは、満足のいくものとなった。

鏡の中には、下着姿のひとりの女がいた。

髪は短かったが、ふくらませた感じでブロウすると、

なんとかショートカットの女性に見えた。

直樹は、クローゼットから、彼がこの前の誕生日、恵子に買ってやった服を出して、着てみた。

ブラウジングされた衿の白のワンピースだ。

そして、クローゼットの鏡の前に立って、驚いた。

その服は、恵子が着ているときより、直樹の方がずっと似合っていたのだ。

直樹の実年齢は、今、二十六。ところが、鏡の中の

女は、二十歳そこそこにしか見えない。十代だと言ってもじゅうぶん通るほど、若く美しく輝いていた。

キュートで、しかもどこか消え入りそうなかなさのようなものがあつた。恥じらっているようなまなざしが、不思議な色香を漂わせていた。

もしかしたら僕は、女として恵子より魅力的なのかも知れない。

直樹は、鏡の前でさまざまポーズをとつてみた。

もし僕が、街でこんな子とすれちがったら、思わず声をかけてしまいそうだ。

そう思ったとき、直樹の頭に、ある異様な考えが閃いた。

恵子を奪った憎いあの男、佐江木政行の真実の姿を暴き、復讐できるかも知れない。

そして恵子には、僕の味わったのと同じ思いを味わせてやることができるかも知れないのだ。

半年が瞬く間に過ぎた。

その間に、直樹の生活は一変した。

離婚と同時に会社を辞めた。上司にはあれこれ聞かされたが、これを機に郷里に帰ると答えておいた。

それから、住んでいたマンションを売り払い、ワンルームの賃貸マンションに引っ越した。

退職金と社内預金の払い戻し、それに、マンション

を売った金を全部合わせると、三年ぐらいは何もしないでも食べていけるだけの金額になった。

直樹は、その三分の二以上を、惜しげもなく、女装のための費用として使った。

恵子の残していったものは、全部持ってきたが、それだけでは決定的に足りない気がした。

ブラジャーに入れるシリコンパッドや、ウィッグはもちろん、服や靴、バッグ、アクセサリーと、たくさ

んの高級ブランドのアイテムを買い込んだ。

ワンルームの部屋の大部分は、ハンガースタンドで占められ、まるでレンタルブティックのようになった。

週に二度、エステティックサロンへも通った。

最近では、男性客でも妙な目で見ないエステは増えた。それでも、全身脱毛、全身美容、痩身、フェイスケアとフルメニューをこなす男性は、そうざらにはいないだろう。エステティシヤンの女の子たちが、あれ

これ噂しているのも耳に入っただ、直樹は気にしないようにした。

おかげで、直樹の肌は、以前にも増してきめ細かく色白で艶やかになっていった。

髪の毛も伸ばした。最高級のカツテイングサロンでカットしてもらっているショートレイヤーは、三ヶ月目には、すっかり形が整い、ふだんはウィッグをつける必要もなくなった。

化粧品も、あらゆるメーカーのものを揃え、その中から、自分の肌に合うものだけを選んだ。

一日三時間以上も鏡台の前に座り、メイクの練習をした。

女らしいプロポーションをつくるために直樹が実行したことは、いちばん壮絶だった。

最初の一か月で、体重を五キロ増やした。

その後、ボディースーツやウエストニッパーで締めつ

けながら、エステティシヤンのつくってくれたカロリー表に従って、十一キロの減量をした。

それはまるで、自分の体を素材に、彫刻でも刻んでいるような作業だった。

全体に丸みを帯びさせた上で、いらぬ肉だけをそぎ落とす。

直樹の体は、ホルモン薬など使っていないにもかかわらず、女性的なラインでふちどられた。

豊満とはいかないまでも、それとわかるくらいに膨らんだ乳房。

その中に内臓が存在するとは信じがたいくらいに、くびれたウエスト。

そして、十分なボリュームを持ちながらも可愛らしくつんと上を向いたヒップ。

たとえば裸でいても、近くへ寄らなければ男だとは気づかれないほどの肉体を、彼は自らの努力で作りだし

たのだ。

この執念はいったいどこからくるのか、彼自身にもよくわからなかった。

ただ、初めて女装したあの日感じた、恵子と佐江木に復讐できるかもしれないという発想。そのわくわくするような予感だけは、妙に確かなものに思えた。そして今は、それだけが直樹の生き甲斐となっていた。

四ヶ月目から彼は、佐江木を罠にはめるための手だ

てを練った。

あの両刀使いのドンファンをたぶらかすためには、顔や体を美しくするだけでは充分ではない気がした。

そこで彼は、女としての魅力を身につけるための訓練を自分に課した。

一日二十四時間を、ずっと女性として生活するようにした。

恥ずかしさに耐えて、女装して外出した。

参考に、自分の気に入っている内外の女優の出ているビデオソフトを借りてきて、見た。

そして、そのシーンを真似て、自ら演じてみる。

さらに、それをハミリビデオに撮り、何度も練習を繰り返し、女性らしい立ち居振る舞いを修得した。

もう一方で、以前とは別の興信所に依頼して、佐江木政行について、徹底的に調べあげた。履歴、仕事の内容、社内での評価と評判、趣味、立ち回り先、食事

の嗜好まで。

佐江木がゲイボーイと同棲していたというのは、どうやら事実のようだった。やはり佐江木は恵子に嘘を
ついているのだ。

ところが意外だったのは、佐江木は、そのゲイボーイと別れて以来、どこをさがしても、ホモ的な行動をとっていないことだ。仕事仲間から誘われれば、よく飲みに行くにもかかわらず、行き先がその手の店だと

知ると、かたくなに固辞することさえわかった。

佐江木がホモだという考えは間違いだったんだろうか。

もしかしたら、僕のやっていることは根本的に間違った前提に立っているのかも知れない。

だんだんと、直樹は不安になった。

しかし、ここまで来てしまった以上、もう後戻りはできない気がした。

八月末のある雨の夜。直樹は半年かけて用意した計画を、実行に移した。

都内のあるホテルのバー。

このホテルには、佐江木の会社の合弁相手の技術幹部が、来日し長期滞在している。その幹部を接待し、ホテルまで送ってきた後、佐江木はいつもこのバーで一二杯飲んでゆく。

慣れない英語での接待の疲れを癒すためだろう。

今夜も佐江木は、カウンターでひとりグラスを傾けていた。

ドアをくぐると直樹は、すばやく佐江木を観察した。太ってはいないががつしりとした肩。陽に焼けてつややかな肌。筋肉質の腕にびっしりと生えた産毛が、カウンターのライトを受けて金色に輝いている。すべてが直樹とは正反対のタイプの男だ。

ワインカラーのワンピースに身を包んだ直樹は、佐江木の背後から近寄り――

「ここ、よろしいかしら？」

じゅうぶんに魅力的に、しかし声音だけは変えずに言った。

無理をすれば女性的な高い声を出せなくはないが、直樹は、あえて男のままの声で言ってみた。もし、佐江木が直樹の思っているような人間なら、たぶんこの

方が効果的なはずだ。

声に振り向いた佐江木は、ぽかんと口を開いたまま
で、しばらく直樹を見つめていた。

「よろしいかしら？」

ちよつと首を傾げながら繰り返した。

「え、ええ。どうぞ」

佐江木は慌てて、隣の椅子を引いた。

椅子につくと、直樹はカクテルを注文した。

佐江木は、直樹の方を気にしている気配だった。

スリットの入ったスカートの脚を組み、直樹は細巻きのメンソール煙草をセカンドバッグから出して喫つた。フィルターに、ワンピースと揃いのワインカラーのルージュがついた。

煙草を消すと、片肘で頬杖をつき、物思いに耽っているという風情で、カクテルグラスを唇でもてあそんだ。

その間、直樹は佐江木の視線を痛いほど感じていた。スリップの胸のラインぎりぎりまで切れ込んだ衿からのぞく白い肌が、ワンピースの色に助けられ、いつも透き通るような白さで輝いているだろう。

ノースリーブからすらりと伸びた腕と、小指を立ててカクテルグラスを持つ手は、どんな女よりか細く、優雅に見えるだろう。

ブラジャーに包まれたシリコンパッドのバストは、

これ以上ないというほどの理想的な曲線を描いているはずだ。

この男の目に、今僕はどんなふう映っているだろう？

パーティー帰りのOL？ 不倫の相手と待ち合わせしている社長秘書？ 男に捨てられた女子大生？

いや、この男は、さっき僕の声を聞いた。

今、奴は、スリットからのぞいた形のよい脚を眺め

ながら、僕のスカートの中を想像しているにちがいない。

直樹は、ストッキングに包まれた内腿あたりが、かすかに汗ばんでくるのを感じた。

佐江木の気配に神経を集中しながらも、直樹は、佐江木の方を一度も見なかった。

佐江木が、自分のことをじゅうぶんに観察し終わった頃を見計らって、彼は、テレホンブースへと席を立

った。

出るわけのない相手——自分の部屋の番号をプッシュする。

手帳を見るふりをして、佐江木をそっと見た。どうやら佐江木もこちらを窺っていたらしく慌てて目をそらせた。

直樹は、好首尾に内心ほくそえんだ。

最初から物欲しそうな顔はしない方がいい。今日は

このへんが退け時だ。

カウンターへ帰った直樹は、カクテルの代金を払い、店を出た。

カウンターに、ワンピースと同じ色の、革張りの小さな手帳を置き忘れて。

2

次の日、直樹は何も手につかなかった。

ウエストに肉をつけないために毎朝の日課として
いるエアロビクスも、化粧さえする気にならずに、
起き
たままのネグリジェ姿で、ただぼんやりしていた。

この半年間努力してきたことの最初の結果が、今日出る。

直樹は、まるで入学試験の通知を待っている受験生のような心境で、その午前中を過ごした。

予想していた佐江木の昼休みの時間帯にも、電話はなかった。

直樹は、だんだん不安な気持ちに陥っていった。

佐江木は、あの電話番号を書いた手帳に気づかなか

ったのかも知れない。

たとえ気づいても、そのままバーテンに預けて帰ったということだって考えられる。

そもそも、佐江木がこちらを注目していたという認識そのものが、僕の錯覚だったのかも知れないじゃないか。

熱に浮かされたように、この半年間を送った僕が、その熱のせいで、そう思い込んだだけかも知れないの

だ。

きつと、そうにちがいない。

僕は、自分が思っているほど、魅力的な女ではないのだ。

もしかしたら、客観的にはこれ以上醜悪なものはないという存在なのかも知れない。

昨夜、佐江木から感じた、僕の肌をなめるような視線は、単なる好奇の目だったのだ。

直樹にはこの半年間の自分の行動が、まったく馬鹿げたものに思えてきた。

貴重な金と時間を使い、僕はなんて馬鹿なことをしてたんだ。気が狂っていたとしか思えない。

そんなことをあれこれ考えて、膝を抱えていた三時半過ぎ、電話が鳴った。

「もしもし、原田直美さんのお宅ですか？」

それは、直樹が手帳に記しておいた名前だった。

「はい、そうですが」

「あなた、ですね？」

「ええ、わたくしですが……なにか？」

「あ、失礼、僕、佐江木ともうします。じつはあなたの手帳をお預かりしてまして」

「あ、はい。昨夜から見あたらなくて、困っていたんですの。わざわざ、どうもありがとうございます。で、

どこにありまして？」

「Oホテルのバーラウンジですよ。僕、あなたの隣に座っていた者です。覚えてらっしゃいませんか？」

「ええ、もうしわけありません。ちよつと考えごとをしてたものですから」

「いや、べつにいいんですが。それで、お返ししなきゃいけません、住所がよくわかりませんし」

「いえ、とんでもありませんわ。こちらから出向きま

すから」

「そうですか。じゃ、きのうのホテルのロビーで、七時に」

「ええ、うかがいます。ほんとうにどうもありがとうございます」
「ございました」

「いえ、ところで、失礼ですが、あなたは……」

「はい？　なんでしょう」

「いえ、いいんです。お会いした時にでも」

直樹は、そのホテルに二十分近く遅れて行った。

メイクを入念にしていたせいもあるが、最初のデートは、少しくらい待たせた方がいいと思ったのだ。

佐江木は、ロビーのソファでニューズウィークを読みながら待っていた。

「あのお、佐江木さんでらっしゃいますね。もうしわけありません。道が混んでいたものですから」

「あ、いや……」

佐江木は、そう言ったまま、直樹をしげしげとながめた。

「どうかなさいまして？」

佐江木の前に腰掛けながら、直樹がきく。

「いや、きのうとずいぶん印象がちがうものだから」

「あら、そうかしら？」

事実、今日の直樹の服装は、昨日とはうって変わった

たものだっただ。

胸の部分を大きなラッフルで飾った白いミニドレス。細い肩紐が両肩の上で蝶結びされているだけで、首から腕までの肌をあらわに出している。

昨夜のが大人の女の魅力だったとすれば、今日は少女のコケットといったらいいだろうか。

小柄でなで肩の直樹は、それをすこしも不自然に感じさせずに着こなしている。

「あたしには、似合いませんこと？」

「いや、とんでもない。とても可愛いですよ」

「ありがとうございます。うれしいわ」

直樹はいたずらっぽく笑ってみせた。

「あ、そうそう、忘れないうちに、これ、返しておきます」

「あ、ほんとうにありがとうございます。おかげで助かりました」

「どうですか？ お近づきのしるしにお食事でも。まだなんでしょ？」

佐江木が連れて行ったのは、近くのドイツ料理店だった。

食事の間、ふたりは親しげにあれこれ談笑した。

主には佐江木の趣味の話が中心だった。佐江木のことをすべて調べ尽くしている直樹にとっては、どれも

周知のことだった。

「やはり仕事柄、いちばんの趣味は車ですね」と佐江木が言ったとき、直樹は、思わず「いちばんはラブアフェアでしょ」と言い返しそうになった。

食事の後、佐江木は黒ビールを、直樹はロゼのワインを追加した。ボーイがそれぞれのグラスに注いで立ち去った後、おもむろに佐江木が切り出した。

「じつはお電話で言いかけたことなんだけど……」

「ええ、なんですか？」

「いや、……やめときましょう」

「いやだわ、言い出しておいて」

「でも、直美さんのような美しい女性に対して、あま
りにも失礼だから」

「なんですか？　言ってください」

「じつは、……ちよつと不遜な想像をしましてね。も
しかしたら……君は、本当は男なんじゃないかって」

「まあ」

「いや、失礼、くだらん妄想です」

「でも、どうしてそんなことお考えになったのかしら？」

「君の声が……それに、どことは言えないけれど全体の感じが……しかし、ハスキーな声の女性なんて、考えてみればいくらでもいるわけだから。ほんとうに失礼なこと、言ったやったな」

「いえ……いいんですの。ほんとの……ことですから」
「え？」

「あたし、正真正銘の男なんです」

直樹がそう言ったとき、佐江木はひどく狼狽したように見えた。

「気味が悪いとお思いでしょ、あたしのこと」

「い、いや、そんなことは……」

「でも、しょうがないんです。あたし、小さな頃から、

女の子になりたくて……」

直樹は、この日のために長い間考えてきたせりふをつづけた。

「女の子になつて、優しく強い男性に愛されたいって、ずっと思ってきたんです」

佐江木は沈黙していた。

沈黙して、直樹のことを見つめていた。それは、何か気持ちのたかぶりを沈めているようでもあった。

「あたし、もう……失礼した方がいいみたい」

直樹が席を立ちかけると、佐江木がその腕をとった。
「待って。ちがうんです。僕はなんとも思っていないせ
ん。いや、むしろ、君のように美しくて可愛い人なら、
そんなふうになって当然だと思います。もう少し、も
う少しここにいてください」

それは妙に切実な、哀願といってもいいような語調
だった。

そのくせ、直樹がもう一度席につくと、佐江木はまた黙り込んでしまったのだ。

「タクシーのつかまるところまで、歩きましょう」
長い沈黙が続いた後、どちらが言うともなく、二人は店を出た。

ひとけのない街中の大きな公園の小径を歩きながら、ずっと黙っていた佐江木が口を開いた。

「昨夜、ずいぶん沈んでいたようだったけど……」

「ええ、ちよつと……悲しいことがあつたんです」

「よかったら、聞かせてください」

「三年間いっしょに暮らしてた人が、出て行つたんです。他に好きな人ができたといつて」

もちろんそれは、恵子のことだ。

「ひどいやつだな」

佐江木は、直樹の相手が男だと勝手に思いこんでい

るようだった。

「だけど、しかたないんです。その新しい方、ずいぶんセクシーな人らしいから。あたしみたいな不完全な人間には、とても太刀打ちできないもの」

それは、佐江木にはわかるはずもない、佐江木への皮肉だった。

「ほんとに、愛してたのに……」

直樹は、今にも泣き出しそうなか細い声で言った。

と、佐江木が立ち止まった。

「直美さん……」

それは、あまりにも不意だった。

直樹には抵抗するすきすらなかった。

佐江木は、直樹を抱き寄せると、唇を合わせてきたのだ。

白いドレスのむき出しの肩を、佐江木の太い腕で強く抱きすくめられ、直樹は持っていたバッグを取り落

とした。

バッグがじやり道に突きささる音が、誰もいない夜の公園に響いた。

佐江木のキスは、なうてのプレイボーイには似合わない、性急な感じがした。

強く抱きしめられ、唇を吸われて、直樹は背筋にぞくぞくとしたものが走るのを感じた。直樹は、それを悪感おかんだと思った。

佐江木がちよつと力を緩めたので、直樹はやつと身を離すことができた。

しかし、足がすくんで、その場を動くこともできない。

荒い息づかいのまま、立ちすくんで佐江木を見ていた。

うなだれていた佐江木が、顔を上げた。

「すみません。今夜初めて口をきいた君に、こんなこ

と、するつもりはなかったんだけど……。直美さん、君があんまりにもいじらしくて……」

「……」

「許してください」

それだけ言うと、佐江木はまた歩きだした。直樹もそれに従った。

広い道路に出て、佐江木はタクシーを停めてくれた。直樹が乗り込むと、歩道の佐江木が言った。

「厚かましいと思うかも知れませんが、もしよかったら、今度の休みにドライブにつき合ってください。また、電話します」

校舎の中には、もう誰も残っていない。

セーラー服の少女は、まだ待ちつづけている。

ずいぶん時間がたってしまった。

もしかしたら、もう誰もこないのかも知れない。

このまま待ち続けて、

あたしは死んでしまうのかも知れない。

そんな気がした。

と、校門の向こうの渡り廊下の間を、

こっちへ向かってやってくる人影。

少女は、期待と不安と、それに恥ずかしさで、顔を上げられない。

もしかしたら……

もしかしたら、あの人も知れない。

少女は頬を紅らめる。

土曜日、直樹は朝早く目覚めた。

ゆつくりとバスを使い、体じゅうの無駄毛も処理した。

髪を乾かした後、鏡台の前に座り、メイクにかかる。
きょうはパステルピンクを基調にすることにきめ

た。シャドーも、チークも、リップも、マニキュアもぜんぶピンクだ。

紅筆を唇にあてながら、直樹は、この前の夜のことを思い出していた。

すべてが僕の思惑どおりに運んでいた。たしかにキスは余分だったけれど、佐江木が僕に夢中になるようにしむけるためには、それくらいのこととは、我慢しなければならぬだろう。それにしても……。

メイクのあと、ランジェリーをつける。

シリコンパッドを入れたストラップレスのブラジャ
ー。胸元のフリルづかいがかわいいピンクのキャミソ
ール。薄い絹のペチコート。

直樹は、鏡の前で横向きに胸を反らしてシルエット
を確かめた。

魅惑的な若い娘の肢体が、そこにはあった。

：：それにしても、あの夜、帰りのタクシーの中でず

つと感じていた感触はなんなのだろう。悪感というには、妙に体の芯の方から沸き上がってくるような……体が、宙に浮いてしまったような妙な感じだった。そして、また今日……

服を選ぶ。

今日は、佐江木の車で軽井沢のあたりまでドライブする約束になっている。高原向きのカジュアルな服装がいい。

ずらりと並んだハンガーの中から、直樹は一枚のサマーセーターを取り出した。麻の荒編みで色はペパーミントグリーン。

袖を通して鏡を見る。

だぶつとして、ずり落ちそうなオフショルダー気味のネックラインから、キャミソールのストラップが見え隠れする。それに、編み目の間からもキャミソールが透けて見えてしまう。

ちよつと恥ずかしいかなとも思えたが、パステルト
ーンの取り合わせがかわいいので、これにきめた。

スカートは、やはりピンクのフレアーにする。

：：そして、今日、自分でも理解しがたいほどワクワク
しているのは何故だろう。いったい僕はどうしたと
いうんだろう。自分の書いた筋書きどおりにことが運
んでいるだけなのに……。

大きめのショルダーバッグに化粧ポーチを入れた

後、直樹はちよつと考え込んだ。

しかしすぐに、チェストの引き出しから、下着の替えを取り出し、バッグに入れた。

この夏もう終わろうとしている高原の道は、すでに色づきはじめ、たくさんの赤とんぼが飛び交っていた。

その中をシルバーメタリックの車が疾走する。佐江

木の会社が作っているスポーツ仕様の高級車だ。

待ち合わせの場所で会ってからずっと、直樹と佐江木はどこにでもいる若い恋人たちのように振る舞っていた。

CDプレーヤーの軽快なフュージョンミュージックが流れる車内で、好きな音楽の話、最近見た映画の話、ミステリー小説のトリックについての素人批評……そんな話題が次から次へ飛び出して、会話がはずんだ。

軽井沢に着いてからも、車を停め、お定まりのコースを歩いた。

まるで原宿がそのまま引越してきたようなブティックを覗き、ちょうど教会を馬車で出発するところだった新郎新婦を冷やかし、旧軽井沢の豪華な別荘にため息をついた。

時計が五時を少し回った頃、二人はカフェテラスのテーブルにっていた。

「佐江木さんて、結婚してらっしゃるんでしょ？」

会話の途中、不意をついたように直樹は言ってみた。

佐江木はちよつとためらった後、答えた。

「いや。：：だけど、いっしょに暮らしている女性は
いる」

恵子のことだ。

「やっぱりね、そんな感じがしたもの」

「どうして？」

「おんなのカン、って言っちゃダメ？」

直樹が軽い感じて受け答えたので、佐江木も気が楽になったらしく、笑った。

ここはちよつとくすぐってやるべきだ。佐江木の正体がわかるかもしれぬ。

直樹は、いたずらっぽく目をしてつづけた。

「だとすると、あたしを誘ったのは、単なる好奇心なんだ」

「いや、そうじゃないよ」

「じゃ、なに？」

「君には最初から惹かれていたんだ。けっして好奇心や浮気じゃない」

「うそばかり」

「嘘じゃないよ」

「だって、あたしは男よ」

「はじめて会ったときからそうじゃいかと思ってた

って、この前言ったろ」

「じゃ、どうしてあたしなんかに。ふつうの男の人は、あたしみたいなの、気味悪がるものよ。それに佐江木さんには、ちゃんとした女性の恋人だっているんだし」

佐江木は急に真面目な顔になった。

「君とは、運命的なものを感じるんだ」

「運命的？　どういうこと？」

「これ以上は、ここでは話せない」

それだけ言うと、佐江木はレシートを持って立ち上がった。

直樹は後に従う以外なかった。

車に戻ると佐江木は終始無言で走らせた。その顔は、直樹に対して怒っているようにさえ見えた。

どうしたんだろう？ 今日ほこれで帰るんだろうか？

直樹がそう思っていると、車は一軒の山小屋をかたどった別荘の前で停まった。

訝^{いぶか}しそうに、助手席からその別荘を眺めていた直樹に、佐江木が言った。

「なにかと僕に目をかけてくれてる重役がいてね。その人のなんだ、ここは。自由に使っていいって言われてる」

佐江木は、ポケットから一個のキーを取り出した。

佐江木は、コーナーに造られたホームバーのカウンターの中で、水割りの準備をしている。

部屋に入ってから、なにも口をきかない。

直樹はリビングのソファに座り、サマーセーターのネックラインが、細い肩からずり落ちそうになるのを感じしながら、身を固くしていた。

これからいったい何が起こるんだろう？

自分で仕掛けたことなのに、直樹は逃げ出したいような気持ちになっていた。

それほど、先刻からの佐江木の態度には、切羽詰まったものが感じられたのだ。

ウイスキーとグラス、それに、アイスポットをのせたトレーを、テーブルの上に置くと、佐江木は静かに話しはじめた。

「僕は大学時代、君のような人と暮らしてた。もつと

もその人は、君とはちがつて、それを商売にしてたんだけれど」

水割りのグラスを手渡しながら、佐江木はちらりと直樹を見た。

「当時僕は、金のないアルバイト学生だった。郷里の家も貧しかったんで、学費から生活費まで、全部自分の手で稼いでいた。学校へ行く時間や、勉強する時間だってほしいから、当然率のいいバイトをさがすこと

になる。それで始めたのが、新宿の小さなバーのバーテンだった。そこで、その人と出会ったんだ」

佐江木の話はこうだった。

そのゲイボーイは、いつも店を閉める寸前、明け方近くになってひとりで現れた。自分の出ている店の閉店後、帰りがけに寄るらしかった。

最初は単なるバーテンと奇妙な酔客として、ほとん

どしやべることともなかったのだが、そんなことが毎日
つづくうち、次第に親しく口をきくようになった。特
に、年齢が同じ十八だと知ってから、お互い、妙な
警戒心がなくなり、佐江木が店を閉めた後、アパート
までタクシーで送ってもらうようなことも多くなっ
た。

そんなある日、店で佐江木が倒れた。

当時から、がっちりした体でじょうぶな佐江木だっ

たが、過度の睡眠不足と、不規則で貧しい食生活がたたったのだ。

佐江木が目を覚ましたのは、そのゲイボーイのマンションだった。彼女は佐江木を寝ずに看病してくれていた。

数日間で、佐江木はすっかり元気を取り戻したが、彼女は、佐江木にアルバイトを辞めるように勧めた。学費くらいは、自分が出してあげられると言うのだ。

出世払いでいいという彼女の言葉に、佐江木は甘えた。

そして佐江木は、けっきよく彼女の部屋で暮らすことになる。

当然、肉体的な関係もできた。佐江木は、彼女を完全に女性として扱ったので、彼女はそれがうれしかったらしく、佐江木にあれこれとつくしてくれた。

佐江木が四年生になった秋、今の会社から、採用の

内定通知が届いた。大手に就職が決まったことを、彼女には心から喜んでくれた。

ところが、翌日佐江木が大学から帰ると、マンションはもぬけのからになっていた。佐江木のものを残して、家具から衣類まで、きれいさっぱり運び出されていた。

佐江木は管理人から、彼女が置いて行つた当面の生活費と、手紙を受け取った。その手紙には「就職のじ

やまになるといけないので、自分は身を退くことにした。探さないでほしい」と記されていた。

「彼女は、僕にとって、生まれて初めての”おんな”だったんだ」

佐江木は、水割りを一気に飲み干すにつづけた。

「半年後、千葉のある町で殺人事件があった。その新聞記事を読んで、僕は愕然とした。被害者の名は、彼

女の本名だった。『痴情の果てのホモ殺人』なんて、新聞や週刊誌は、興味本位に書いてた。僕はやりきれなかったよ」

佐江木は泣いてでもいるように、うつむいて静かに首を振った。

直樹は、なんと声をかけてよいのかわからず、ただ佐江木を見つめていた。

「それから僕は、彼女のことを忘れるために、次から

次へと女をもてあそんだ。自分がけっしてホモではないということを証明したくもあつたんだ。ところが、僕の体には彼女の肉体の刻印が、刻みつけられてたらしい。どんな女と寝ても、なにも感じない。不能というわけじゃない。女を悦ばせることはできる。なのに、僕自身はなんの悦びもない。僕は焦った。あせって、さらに女遊びをエスカレートさせた。中には、性格が好きで、いっしょに暮らした女も何人もいる。でも、

けつきよく彼女との間に感じたようなセックスの悦びは、見失ったままなんだ」

佐江木は深いため息をついた。

「今いっしょに住んでる女もいい女だ。ちよつと気が強くて、男のような性格を逆にかわいいとも思う。たしかに最初の頃は、いくぶんかはセックスの悦びも感じられるような気がした。でも、やっぱりだめだった」

恵子についての話をききながら、直樹はなぜか佐江

木に妙な共感を覚えていた。

「僕は、まわりからはプレイボーイだと思われてる。

でも、今よくわかったのは、じつは彼女の思い出から逃げるためにそうしてたんだということだ。僕は、君のような人の出現を恐れていた。僕の体が覚えてしまった彼女との甘い生活を、なんとか拭い去って、まともになんか女を愛せる男になるために、次々に女を漁り歩いてたんだ。でも、そうすればするほど、彼女の面影は、

僕の心の中に、澱のように溜まっていく。そんなとき、君と出会ったんだ。出会った瞬間、君には彼女と同じ匂いを感じた。君の忘れていった手帳を見つけて、ずいぶん迷った末に、電話をかけたんだ」

やっぱり佐江木はホモだった。

直樹は自分の考えが正しかったことを知った。半年間かけて仕組んだ罠に、佐江木はまんまとはまってく

れたのだ。

なのに、少しも嬉しくなかった。

佐江木は、直樹の前でうつむいたまま、水割りのグラスを眺めていた。

直樹は、ソファを立ち、テーブルを回って、佐江木の隣に座った。

やはり、佐江木は泣いているようだった。

「政行さん……」

直樹は佐江木をのぞき込むようにして声を掛けたが、それ以上なにを言っていないのかわからない。

佐江木が顔を上げ、直樹を見つめた。

まるで少年のような目だ。

直樹は、そう思った。

と、グラスをテーブルに置いた佐江木が、突然、直樹を抱き寄せた。

「直美さん……」

佐江木の胸にもたれかかるかたちになった直樹の唇を佐江木の唇がおおった。

がっちりした体躯の佐江木に抱きすくめられて、直樹はなにもすることができない。

佐江木の唇は、次第に直樹の頬から首筋へと這っていった。

「……だめ……」

サマーセーターの左肩が完全にずり落ちた。

キャミソールのストラップにそって、佐江木の唇が降りてゆく。

佐江木の右手が、シリコンパッドでふくらんだ胸に触れ、揉みしだく。

「だめよ。許して……」

そう言った直樹の口を塞ぐように、ふたたび佐江木がキスをしてくる。

佐江木の舌が、直樹の唇を割って入ってきた。舌を

からめてくる佐江木に、思わず応えそうになりながら、直樹はかろうじて考えた。

だめだ。これ以上は、僕の目的じゃない。僕は、佐江木がホモだということを証明しさえすれば、それではよかったんだ。

そのことで、恵子との仲をぶち壊してやれば……。なんとか逃げださなきゃ。それに、……。こわい。

佐江木の手が、直樹のフレアスカートの裾から忍び

込んできた。ペチコートの上から、直樹の脚を撫でる。ペチコートとストッキングが擦れ合う微妙な感触が、直樹の腿の上を這う。

直樹は両腿をきつく閉じた。にもかかわらず、ペチコートをはね上げた佐江木の手が押し入り、直樹の脚をむりやり開かせる。

やっぱり、男の人の力にはかなわない。

そんなふうに感じることで自体、自分を女性視してい

るのだということに、冷静さを失っている直樹はまったく気づかない。

逃げださなきゃ。なんとか……。

佐江木に秘芯を触られて、直樹ははじめて自分のそれがシェーパンツの中で勃起していることに気づいた。

いけない。このままでは、僕はおかしくなってしまう。

「待って……」

佐江木を振りきるようにして唇を離すと、直樹はやつと言った。

直樹を抱く佐江木の力が、ちよつと緩んだ。

どうしよう？　このままこの手を振りほどいて逃げ出しても、興奮している佐江木は僕をつかまえて、床の上に押し倒すだろう。

直樹は考えをめぐらせた末、いたずらっぽい笑顔を

つくって佐江木を見つめ、佐江木のズボンの前に手をかけた。

すばやくボタンをはずし、ファスナーを下ろす。

そして、佐江木の膝の上に倒れるようにして、佐江木の白いブリーフの張りつめた部分にキスした。

ほのかな異臭を感じながら、直樹は強く唇を押しあてた。

こうすれば、とりあえず、佐江木の力は緩む。逃げ

出すすきもできるだろう。

直樹はそう考えた。

そして、もうひとつの計算。

この下着を洗うのは、おそらく恵子だろう。恵子に自分の存在を知らせてやりたい。他の男に走り、自分を捨てた恵子に、同じ思いを味わわせてやるのだ。

唇を離すと、案の定、佐江木のブリーフの上に直樹のパステルピンクのリップのあとがはつきりと残され

ていた。

これは、僕から恵子への最後のメッセーじだ。

さよなら、恵子。

心の中でそうつぶやきながら、直樹はもう一度、それに見入った。

と、そのリップのあとが脈打ちながらさらに盛り上がってきた。

その唇はまるで、それ自体が一個の生き物でもあ

るかのようになまめかしく動いた。

男のブリーフの上で息づく僕の唇。

この男は僕という”おんな”に、こんなにも感じてくれている。

そう思った瞬間、直樹は心の奥底から沸き上がってくる抗がいがたい力に押されて、自分でも信じられないような行動に出ていた。

佐江木の前にひざまづき、そのブリーフを引き下ろ

すと、いきり立つ佐江木にペニスをくわえたのだ。

くわえ、しゃぶり、齒を立てる。

佐江木のそれは、直樹の口の中でさらに怒張し、直樹は顎が痛くなるほどに口を開かなければならなかった。

直樹にはもう、何がなんだかわからなかった。

いったい僕は何ということをしているんだろう？

どこかでそう思いながらも、直樹自身も興奮していた。

佐江木がのけぞるようにして腰を突きだした。

佐江木のは直樹の喉に突き刺さるように奥まで入ってきた。

直樹はむせ返りそうになりながら、口の中でそれに舌を押しつけた。

恵子もこんなことをするんだろうか？

直樹の頭に、ふとそんな考えが浮かんだ。

恵子になんか、負けはしない。

直樹は、知らず知らずのうちに恵子と張り合っていた。

これは、今、恵子のものじゃなくて、僕の……あたしのもの……よ。ほら、こんなに硬くなってる。恵子になんか、負けないわ。だいいち、恵子には絶対わからないことがあたしにはわかるもの。この人が、どうすれば嬉しいか……

直樹は、佐江木のペニスの付け根を握った指に、思

いきり力を込めた。

佐江木はふたたび、声をあげてのけぞった。

ほらね、こんなに張りつめて。でも、これは、ただの欲情じゃない。あたしにはよくわかるの。この人は、まちがいなくあたしを愛してるわ。でなかったら、こんなになりはしないもの。

あなた、思いきり、いつでもいいのよ。恐がることなんてないの。あたしが、あなたのもの、ぜんぶ呑み

干して上げるから。

恵子はきつと、そこまではしてくれないでしょ。

佐江木は、うめきながら果てた。

●「公開版」はここまでです。

◎ここまですを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。

◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。

◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。

◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

完全版を入手する

ペパーミント・マスカレード

Peppermint masquerade

<公開版>

CopyRight 1988 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500